

私のすすめるこの1冊

古賀 松香（幼児教育科 准教授）

『保育の体験と思索：子どもの世界の探究』 津守真 著

保育とは一体なんだろうか。小学校以上の学校教育とは異なり、遊びを中心とした保育の専門性を説明するのは、実は相当難しい。幼稚園や保育所で子どもと遊べば保育？近所の子どもと公園で遊ぶのは保育ではない？それとも幼稚園教諭や保育士の有資格者が子どもと遊べば保育なのか？

そのことを深く考えさせてくれるのが、津守の『保育の体験と思索』である。

「われわれが知覚する子どもの行動は、子どもが心に感じている世界の表現である。子どもの世界は、文字に記録するのが困難なような、表情や、小さな動作や、ことばの抑揚などに表出される。子どもの心の動きを、表現された行動を通して、いかに読みとるかという課題が、保育者に課せられている。(pp.5-6)」

このように津守は、子どもの行動は心の表現であるとし、その子にとってのその行動の意味を読みとることが保育者の大事な仕事だという。「ゆっくりと動くこと(pp.46-47)」という小さな節に、3歳児 Ri とのかかわりが次のように書かれている。

「砂場の別の場所で、隣の組の女兒が私の傍に来て、砂をつかんで私の手に渡し、山のように積み上げる。私はいそがないで、すこしずつ山にする。山を作ることを目標とするなら、どんどん山を作ればいいのだが、自分がそのことに気をとられたら、Riの気持ちから離れてしまうように思い、いそいではいけないような気がして、ゆっくりと手を動かす。」

さまざまな子どもがいろいろな思いを交錯させる保育の場で、ゆっくりと動くことは思いのほか難しい。しかし、津守は Ri とのかかわりの中で、「いそいではいけないような気がして」Riの気持ちから離れないようにかかわる。すると、Riはこうしたゆっくりとした津守とのかかわりの中で、日々の習い事の話しをする。そして、津守は「さらに、この子どものペースに合わせて、原始的な遊びをひき出していくことが必要な子どもであろう」と思索する。砂場で起こったある日のほんの小さなやりとりである。しかし、それが保育という営みとなるには、出会ったおとなが Ri の心の世界を感じ取り、その心の世界に近づいていくことが肝要なのである。

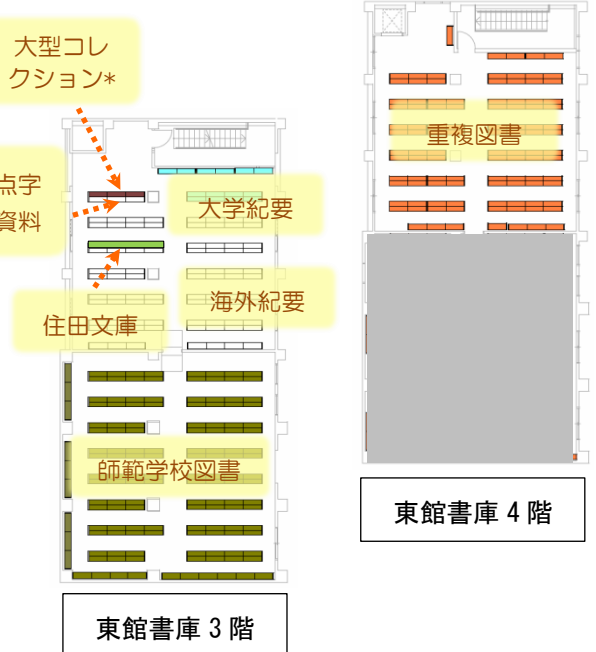
子どもに砂を渡されたらゆっくり積むべし、というのではない。その日そのときの Ri の様子が津守に「いそいではいけないような気」にさせる。どうもそこに大事なものがあるような気がする。ゆっくり動くことが Ri にとって意味があるように感じる。一つひとつの小さな子どもの行動が、そのときにしか生じ得ない体感をおとなの中で生起させる。おとなはそこに意味があると捉えて丁寧にかかわる。それが近所の公園であれ、幼稚園であれ、行動に表されているその子ども独自の心の世界に近づこうとすることが、保育という営みを創っていく。保育とはすべてのおとなにひらかれた意味世界である。本書は子どもとかわる多くのおとなに手にとってもらいたい一冊である。

図書館が新しくなりました!! ～東館書庫編～

6月1日から、東館書庫3・4階が利用できるようになります。今月号では、東館書庫についてご紹介します。

東館書庫の利用について

- どなたでも利用できます（申込不要）
- 手荷物持ち込み OK です
- 利用可能時間は閉館 15 分前までです



- *大型コレクション
- 鍵盤楽器研究学位論文集
 - 師範学校史・各教育史和文コレクション

今月のイベント案内

写真展「小さな花と実」 本学名誉教授 土倉亮一先生 写真展

日時：平成 25 年 5 月 20 日(月)～6 月 14 日(金)※土・日を除く 10:00～16:00

場所：附属図書館北館 1 階 企画展示室

[講演会] 平成 25 年 6 月 6 日(木) 14:00～(30 分程度) 附属図書館北館 2 階 研修・セミナー室 1

本学名誉教授である土倉亮一先生が 15 年以上にわたり採取された、野草の花や実などの写真を展示します。採取されたのは京都市や大津市、およびその近郊の野草や樹木などで、身近な花や実の精巧な作り、優美な色彩に触れられる展示となっておりますので、ぜひお誘いあわせの上お越しください。



第20回

「うたとおはなしの会」報告

平成 25 年 4 月 27 日(土)11 時～12 時

平井 恭子 (幼児教育科 准教授)

2002 年の秋に始まった「うたとおはなしの会」は、長きにわたり地域の子どもたちや保護者から支持され続け、今回で 20 回目を迎えた。そこで、20 回目の開催を記念し、この春リニューアルしたばかりの附属図書館研修・セミナー室1を会場に開催することとなった。当日は晴天にも恵まれ、過去最多の 157 名の親子連れで広い会場はあっという間に満員になった。

まず最初に、ねずみに扮した学生たちが「のねずみのうた」に合わせて登場すると、会場の親子も歌に合わせて身体をゆらしたり一緒に歌ったりするなど、会場全体が和やかな雰囲気に包まれた。そして、続く「森のじゃんけんぽん」では、学生の「じゃんけんぽん」の掛け声に、身体をはずませながら元気よく声を出してじゃんけんを楽しむ子どもたちの姿がたくさん見られた。じゃんけん遊びで盛り上がった後、大型紙芝居「こねこのしろちゃん」では、じゃんけんのときは一変して、子どもたちは優しく穏やかな表情で静かにお話に聞き入っていた。

続いて、パネルシアター「だれのせんたくもの」は、「この〇〇、だれの〇〇?」という歌いかけに、子どもたちも大きな声で唱和したり指さして答えたりするなど、積極的に参加する姿が見られ、最後にお母さんがロケットに乗って旅立つシーンでは会場から大きな拍手が起こった。

恒例となった楽器あそびコーナーでは、今回初めて小学校でも馴染み深いリコーダーを用いたアンサンブルを取り入れた。学生たちがバス、テナー、アルト、ソプラノ、ソプラニーノの 5 本のリコーダーで、「となりのトトロ」をアンサンブルすると、曲に合わせて歌を口ずさむ親子の姿が多く見られた。そして、2 曲目の「さんぽ」では子どもたちも自分が選んだ打楽器でアンサンブルに加わり、学生のリードに合わせて参加者全員で音楽を楽しむことができた。

そしてプログラム最後は、子どもたちに人気の絵本「ぼんたのじどうはんばいき」(加藤ますみ/作、水野次郎/絵)を題材に「人形劇」を上演した。ライオン、きつね、さるなどの動物が代わるがわるの登場し、ぼんたがはっぱに呪文を唱えてほしいものを出してあげるシーンでは、自動販



売機から出てくるものに興味津々の様子で見入っている子どもたちの姿が多く見られた。幼稚園の生活発表会でこのお話の劇を上演した経験がある男児(5歳)とその保護者は、「大好きなお話を人形劇で楽しむことができとても嬉しかった」と喜んでいました。

人形劇を楽しんだ後は幼児教育専攻の1回生 15 名が登場し、会場の子どもたちと一緒に手話を交えながら「はなかつパレード」を歌って閉会した。保護者からは、「大学生のお姉さんたちが一生懸命されていることを、入園前の妹(3歳女兒)が真似っこして楽しんでいる姿を見て、嬉しくて涙が出ました。」「プログラムの合間のお話やタイミング、選曲等、細かいところまで行き届いていて感心しました。」「娘(5歳)は、人形劇にくぎづけでした。次回も是非参加したいです!」など、好意的な意見が多く聞かれた。

これまで「うたとおはなしの会」を経験した数多くの学生が、幼稚園や保育園に就職し、培った経験を幼児教育現場で生かして活躍している。一回一回の子どもたちや保護者の方々との出会いが学生たちの保育者としての成長を大きく後押ししてくれたことに感謝すると同時に、今後も人との出会いを大切に学生とともに努力していきたいと考えている。



解釈を巡って対話する文学の授業の研究
—小集団で一文を読む—

寺田守

京都教育大学紀要. 2013, No.122, pp.11-26.

文学の解釈を巡る対話について、中学3年、1年、小学4年の話し合いを検討しました。

中学3年生のあるグループは、「わたしはそこに立ちつくし、いつまでもクリスマスソングを聴いていた。」(デューク)という一文の意味を話し合いました。彼らは「立ちつくし」を「立っでいて」と比べ、驚いているという意味や動けないという意味があると考えました。中学3年生は上手に意味を紡ぎ出し、合意形成に成功しました。

中学1年生のあるグループは、「黙っていることで、なんとなくやつの言おうとしていることがわたしには分かってくるような気がした。」(ふる場の散髪)を話し合いました。「わたしには」という言葉を消して意味がどう変わるかを考えることで、「わたしには」という言葉に、お父さんが自分にしか分からないと思っているという意味があると考えました。「むず過ぎる。」と奮闘しながらも、言葉の意味について話し合うことで、「あー、なんか今日超楽しい。」とやりがいのある仕事と感ずる姿が見られました。

小学4年生のあるグループは、「ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。」(ごんぎつね)を話し合いました。「まず」という言葉から「次」もあると気づいた学習者が疑問を抱きます。うなぎの長さはこれくらい(1メートル程両手を広げる)で、いわしはこれくらい(20センチ程広げる)だから、いわし5、6匹でうなぎ1匹分のつぐないになっていると考えました。つぐないをうなぎの弁償と理解したのです。その後他の学習者の発言を受け、おっかあにうなぎを食べさせたいという思いへのつぐないだと気づきました。

対話の中で言葉の意味を吟味することで、「あー」という納得の声が起こり、学習者の理解を推し進め、読む楽しさややりがいを感じさせます。

※本タイトルの論文は京都教育大学紀要 122号に掲載されています。

※京都教育大学リポジトリ「クエリ(KUERe)の森」<http://ir.kyokyo-u.ac.jp/dspace/>にも公開されています。

●京都教育大学附属図書館ホームページ <http://lib1.kyokyo-u.ac.jp/>

●携帯版図書館ホームページ <http://lib1.kyokyo-u.ac.jp/m/mhome.htm>

QRコード→



開館日程 □9:00-21:00 ■9:00-17:00 ■休館(CLOSED)

2013年6月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

2013年7月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

7/29-8/2 前期末試験

京教図書館 News No.153 (2013年6月号)

発行日:平成25年6月3日

編集発行:京都教育大学附属図書館

問い合わせ先:library@kyokyo-u.ac.jp



京都教育大学